みなとが支える
私たちのくらし Life

Ports-gateway to the world

みなとから来て、再びみなとへ

くらしから出るゴミをみなとでも受け入れています

くらしが便利になるにつれて、家庭や事業所から発生するゴミ等の廃棄物の量も増え続けています。都市が発展するにつれて、陸上に廃棄物処分場を確保することが困難になってきている現在では、みなとの中に廃棄物処分場が作られることが多くなってきています。

また、多くの産業が立地しているみなとにおいて、ある工場から発生した廃棄物を別の工場で工業原料や代替資源として利用しあうなどして、廃棄物の排出量を限りなくゼロに近づける「ゼロ・エミッション」の取り組みや、みなとの背後の都市部から発生した廃棄物を受け入れ、資源として再利用する動きなどが進んでおり、その輸送にはトラックなどによる陸上輸送だけでなく、大量輸送が可能でかつ環境負荷の小さい海運が活用されています。

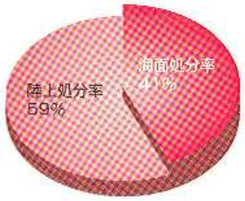
世界中から輸入された原材料を利用してみなとから日本全国に広がったモノは、再びみなとに集まり、わたしたちのくらしに広がっていっているのです。

東京港 新海面処分場

東京湾では東京圏の40%以上のゴミをみなとに受け入れています

全国の人口の約4分の1が集中している東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）のゴミの最終処分量の40%以上を東京湾で受け入れています。

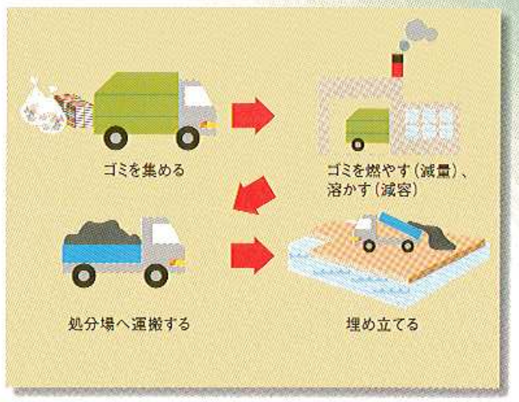
一般廃棄物の海面処分場のシェア（東京湾、1998年）



堺泉北港の処分場

大阪湾フェニックス

各自治体が個別に処分場を確保することが難しい近畿圏では、各自治体が共同で利用できる広域処分場の整備（フェニックス計画）を進めています。埋め立てが終了した後は、物流関連用地や緑地などに利用されます。

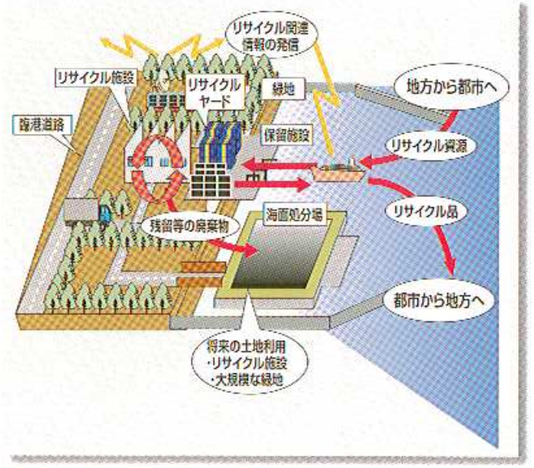


ゴミの中間処理

家庭などから出るゴミをそのまま埋め立てたのでは、処分場はすぐに満杯になってしまいます。このため、収集したゴミは焼却や破砕、溶融等の中間処理をして減量、減容化を図っています。

リサイクル資源の海上輸送の例

北海道で使用されたタイヤは、収集されて苫小牧港から姫路港に輸送され、広畑製鉄工場で鉄の原料や燃焼材としてリサイクルされています。このようなみなととみなとの間を、長距離の大量輸送に適し費用も安く環境にやさしい海上輸送で運ぶことにより、収集・輸送コストの削減がなされています。

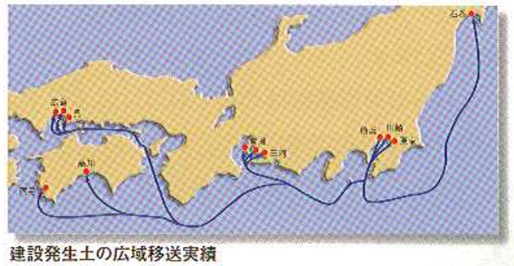


リサイクルポートの形成

広大な用地があり、すでにある工場や岸壁や廃棄物海面処分場の活用が可能なみなとにおいて、他の地域で発生した循環資源を受け入れリサイクルを行い、再生された製品を再び海上輸送されるような取り組みが進められています。

リサイクルポート北九州港・響リサイクル団地予想図

北九州港の響灘地区においては、周辺の都市などから集められた廃棄物を再資源化し、工業原料などに再利用できるようにするための施設で、さまざまな品目を処理する施設が集まっています。



建設発生土の広域移送実績

首都圏の建設発生土は貴重な資源として、全国の港湾で有効利用されています

建設発生土を全国の港湾等の建設資材として広域的に有効活用する事業（スーパーフェニックス事業）により、平成6年度以降、これまで首都圏の公共系事業から発生した東京ドーム約8杯分（1,000万㎥）以上の土が資源として、多くの地域のみなとづくりに役立てられています。

資料：国土交通省港湾局調べ